

回想・図書館と私

奥島 孝康

一 プロローグ

私は昭和三四（一九五九）年に早稲田大学に入学し、明年（二〇一〇年）教授としての定年を迎えようとしている。実に五一年間という長きにわたって、本大学の図書館とのかかわりをもつことになる。この間、私がどのようなかわりをもち、どのような想いをもったかについて、ごく簡単に回想してみたいと思う。

本誌の創刊は、なんと私が入学した昭和三四年の一二月のことであり、前年館長に就任した大野實雄教授（第六代館長）の発議によるものであった。そして、この大野館長こそは「図書館中興の祖」ともいべき名館長であった。さらに、こういう運命のいたずらか（？）、大野館長こそは大学院における私の指導教授だったのである。その意味で、図書館（というよりも本誌）と私とはよくよくの因縁といわなければならない。本誌の歩みは、私の「早稲田人生」とそっくり重なり合っているのである。

二 館長就任前の図書館

学部学生時代の私と中央図書館とのかかわりは、それほど濃密なものではない。法学部学生時代の私にとって図書

館の利用といえば、ゼミの報告の際の下調べに利用するくらいがせいぜいのところで、当時の私は我妻民法とか団藤刑法とか、あるいは宮澤憲法とかにひたすら没頭すればよく、万巻の書を読む必要はなかった。

もとより、法律書に集中したのは二年生後半からであり、それまでは二日で一冊を目標に、岩波文庫の白帯と青帯、それに加えて、岩波新書を次々と読破していったが、これらの書物はアルバイトで自活する苦しい生活の中でも、なんとか古本屋で入手したものである。なぜならば、当時の図書館は現在のように学部学生に対する貸出しを認めていなかったからである。昼間の苦しい肉体アルバイトでたくたになりながらも、下宿でひたすら濫読を続けた結果、二年生後半からようやく難解に思えた法律書が面白く読めるようになってきたのである。

図書館を本格的に利用するようになったのは昭和三八（一九六三）年四月に大学院修士課程に入学してからのことである。指導教授が館長の大野先生であったことから、私には入庫証が発行され、教員閲覧室の利用が許されるという恩恵に浴することになった。嬉しくて、それこそ書庫の中を這いまわり、法律に関するかぎり、どこにどのような書籍があり、どの棚にどのような欧文雑誌があるか、刻明に記憶するほどであった。法律書以外もあれこれ見て廻り、あるときなどは、山本周五郎全集をつい立読みし始め、面白さにその書架の前に椅子を引き寄せ、四、五日かけて全部読了するなどという道草も何度もすることになった。いま考えても、実に楽しい日々であった。

修士論文をまとめるにあたっては、どうせ修士論文ではそれほど理論的なものは無理だと思ったので、寺尾元彦先生の『株式会社資本減少論』を縦軸に、図書館に収集されている「社史」（当時およそ四百冊）の分析を横軸に、資本減少の実証的研究をすることに決めた。そして、来る日も来る日も、午前中は社史と取り組み、午後は辞書片手にフランス会社法の読解に努めて、いま想えば冷汗の出るような修論をようやくでっち上げたのであった。

昭和四〇（一九六五）年博士課程に入学と同時に私は法学部助手に採用されたので、法学部教員図書室の利用が許

されるようになった。和雑誌の利用はこれで十分であったが、フランス会社法に専念する私には、やはり図書館の利用が不可欠であった。私は、図書館のフランスの法律雑誌を一冊一冊目次を繰って、興味のあるテーマについてはカードを作成した。その作業には数ヶ月を要したが、おかげでフランス会社法の問題状況と優秀な研究者の名前を頭に刻み込むことができ、これが私の研究者としての歩みにとって、測り知れないほど確かな導きの糸となった。

大野先生は、法学部長に就任されたため、昭和三九（一九六四）年九月に館長を退任された。それまで私は、大野先生の館長室や学部長室へ必要最小限（したがって年に数回）修論作成上の指導を受けるため、一回せいぜい一〇分間程度お訪ねしたが、後年まさか自分がその部屋の主となるとは夢想だにできなかった。知る人ぞ知ることであるが、大野先生は学生とはまるで無駄口をきかない方であり、およそ人をほめるなどということとは皆無であった。助手になったころ、用事があつて先生宅を訪問した際のこと、先生がなかで中座されたとき、奥様が「主人が貴方のことをほめていたわよ」と言われた言葉がいまだに耳に残っている。私にとって、図書館での辛く、しかし楽しい思い出は、すべて大野先生につながっている。思えば、私の人生のすべては大野先生にある。いま、つくづくそれを思う。

三 館長時代の取組み

私が第十三代図書館長に就任したのは昭和六一（一九八六）年一月のことであった。前任の浜田泰三館長からのバトン・タッチであった。私はそれ以前教務部長を六年近く務めていたので、浜田館長とはきわめて緊密な連携プレーをとつてきており、その意味では、バトン・タッチもかなりスムーズにいったと思つている。浜田教授は西原内閣二期目の常任理事として転出されたので、その点でも私の館長としての執務環境はよかつたといわねばならない。

私は館長就任に当つて、教務部長の時代に学内の閉鎖的な学部エゴのおそまつをさんざん体験してきていたので、

せめて図書行政だけでも全学的視点からオープン化の方向へもっていきたいと考えた。そして、図書館近代化に尽した大野先生の事跡を調べ、その方向へ大きく踏み出すことを決意した。おりしも創立百周年記念事業としての新中央図書館の建設計画が進行中ということもあり、図書館近代化にとっては絶好の時期でもあった。

新中央図書館建設　私の館長時代に書き散した文章の主要なものは、拙著『私の大学論』（早稲田大学出版部、一九九五年）に収録しており、新中央図書館の建設についても、書くべきことは書いておいたので、ここでは繰り返すことはしない。しかし、当時は書けなかった点を中心に若干補足しておくとともに、新中央図書館が外国でどう評価されているかについて、その一端を紹介しておこう。

新中央図書館の建設は、創立百周年事業の一環として計画され、当初建設費六〇億円で出発した。しかし、これは書庫が地下二階までしか建設できない。私は、どうしても四百万冊収蔵の旧国会図書館の規模を上廻る五百万冊収蔵の図書館としたかったこともあり、いったん図書館が完成すると、地下四階までの書庫建設は不可能になるので、この際敷地を最大限有効に活用するためにこのチャンスを生かすべきだと理事会を説き、建設費を二〇億円増額することに同意していただいた。これが新中央図書館の機能を飛躍的に高める最大のポイントとなったと思う。

また、新中央図書館は旧中央図書館とは規模の上で約五倍余りとなったにもかかわらず、専任職員を半減させることができた。建物の規模は五倍になったが、ランニングコストはむしろ減少気味となったのである。それが新中央図書館の最大の成功であると思われる。その困難で複雑な移行事務の一切を担ってもらったのが千葉敏総務課長であった。私は千葉氏を副館長にするつもりであったが、彼は選定年で図書館を去った。

さて、新中央図書館は、その完成後、日本国内はもとより、外国でも注目を浴びるようになったが、その一つの証左がフランスで発行された『Nouvelles Alexandries — Les grands chantiers de bibliothèques dans le monde. Édi-

tions du Cercle de la Librairie, 1996) による。

この本は、『Collection Bibliothèques』の一冊であり、新しく再建されたアレクサンドリア図書館の完成を契機として、フランス国立図書館の版画・写真部門の管理官であるミシェル・メロ (Michel Melot) の監修の下に、ユネスコの援助により、世界の「新しいアレクサンドリア図書館」一五館を、多数の写真、図面等を用いて、その歴史から現状までをその建築の詳細な過程とともに紹介するものであった。早稲田大学の中央図書館は、光栄にも、その一五館中日本ではただ一館、ロンドンの「ブリティッシュ・ライブラリー」やパリの「ビブリオテック・ナシオナル・ド・フランス」と並んで選ばれたのである。その評価は、わが中央図書館は、「知に対する夢をさそわない」などとチョッピリ辛口ながら、その効率性や情報化に対しては総じて高い評価が与えられている。

図書資料および蘭仏図書 わが図書館の収書は館長の個性を反映することも多く、私もかなり意識的に重点的な収書を行なった。その二、三の例について記しておくことにする。

まず第一に、図書資料としてわが図書館に欠けている標本をいくつか収蔵することにした。一つはパピルス紙一枚であり、他の一つは世界で最初の活字印刷のグーテンベルグの聖書の一頁である。パピルスが一枚もないのでは実物教育上問題なので、三百万円で保存のよいものを一枚だけ購入した。グーテンベルグの聖書は、同時期、慶應義塾の図書館が二巻本のうちの一冊(完全なものではない)を約九億円で購入したが、私は教育用として一頁あれば十分と考え、それを五百万円で購入した。

第二に、私はわが図書館の特色である蘭学資料に新たに桂川・今泉文庫などを加えその充実に努めるとともに、従来やや貧弱であったフランスの人文・社会科学系の図書の充実に努めた。とりわけ、東大名誉教授杉捷夫氏の寄贈図書(約一万八千冊)を中心とするフランス関係の図書の収書は膨大なものであったが、加えて、コルヴェア文庫(正式

名は「フランス経済・社会・思想文庫」を購入したことが大きい。

このコルヴェア文庫（約一万冊）は、まさしく逸品であり、一六世紀から一九世紀にかけての社会科学全般にわたる原典・原資料を網羅した二度と市場に出ることはない文庫である。もとより、その価格も当然破格であったが、慶應のグーテンベルグの聖書一冊よりはるかに安く、しかも九年の年賦で入手することができた。慶應の選択に比べれば、決して間違った選択ではなかったと自負している。

高田早苗記念研究図書館

新中央図書館の開館によって、旧図書館の利用をどうするかが問題となったが、旧図

書館の書庫は建物の構造上書庫として利用するほかの選択は許されないもので、東洋一の図書館を目指した高田早苗総長の遺志を承け、「高田早苗記念研究図書館」と命名し、各学部の教員図書室を統合する研究図書館とした。学部エゴのため、配架の統一に苦勞したが、基本的には学部倉庫とする案を退け、図書館らしい配架に近づけることができた。

その後、大閲覧室を中心に「会津八一博士記念博物館」を新設したことは周知のとおりである。私は教務部長当時「博物館」創設を提唱してきたが、歴代総長の受入れるところとならず、その実現には私が総長として提案するまで十数年を要した。

オン・ライン・システムの構築

ハードである新図書館の着工と同時に、ソフトであるオン・ライン総合図書館

システムの構築に着手した。それが、「早稲田大学学術情報ネットワーク・システム」（通称「ワイン」）である。これは、中央図書館をセンターとして、分館であるキャンパス図書館（五館）と部局図書室（約三〇室）をネットワーク化する、当時としてはきわめて野心的な試みであった。

しかし、このシステムを活かすためには図書資料のデータベース化が必要である。洋書は、アメリカの「オンライ

ン・コンピューター・ライブラリー・センター（OCLC）のマーク（MARC）を使用すれば足りるが、和書についてはこれに相当するものがない。そこで、私は、OCLCがオハイオ州立大学から誕生したように、和書の週及入力については、早稲田大学から始めようと決心した。早速、千葉総務課長を中心に検討してもらったところ、ペテランの図書館員を新たに二〇人採用し、年間作業経費一億円を用意して、十年の歳月を要するとの見積りを示された。

これではどうにもならないので、私は業者（三社）に、まず本館分五二万冊の週及入力を三年間で完了するための提案を求めたところ、紀伊國屋の提案が最も優れていたもので、これを採用することに決定した。その提案は、場所と機器をわが図書館が提供し、年間五千万円の経費を負担すれば、紀伊國屋は約三〇名の入力者で作業をし、完成したデータ（ワセダ・マーク）の権利を共有するというものであった。周知のごとく、これで早稲田大学は、最も品質の高いデータを入手し、おまけに、データの権利で洋書データを購入することができるようになったのである。

次にわが図書館側の責任者を誰にするかが問題となり、候補者を推薦してもらったが、その館員から「慶應ならともかく、早稲田の館員のレベルではとてもやれない」と一蹴された。そこで、ペテラン館員の中村義人氏を室長として指名し、紆余曲折はあったが、見事成功したのであった。その証拠に、アメリカ図書館協会での日本書のデータには「ワセダ・マーク」が採用されていると聞く。ちなみに、当時の紀伊國屋側の責任者は現在の高井昌史社長である。

展示会・図録・マイクロフィルム わが図書館の有する豊かな資料は、国宝二点を始め、実に多様なものがある。その歴史と貴重書を概観するものが必要である。そこで、新中央図書館の着工を機に、中沢保氏が中心となってまとめられ、ほとんど完成に近いものに、私が若干手を加えて『早稲田大学図書館蔵資料図録』（一九九〇年）（一九九〇年）と、館員が総力を挙げて作成した『早稲田大学図書館蔵資料図録』（一九九〇年）を発行した。

また、活発な展示会活動を展開し、たとえば、『幕末・明治のメディア展―新聞・錦絵・引札』（昭和六二年）、『生

誕一五〇年記念・図録大隈重信―近代日本の設計者』（昭和六三年）、『ワセダと現代の作家たち』（平成元年）、などを発行するとともに、関連資料の収集に努めた。とりわけ、当時の早稲田出身の作家の生原稿や色紙の収集は当時の生存者のほぼ全員から提供していただき、図書館の貴重な資料となっている。また、これを機に、早稲田出身者の提供された著作を収集・保存する「稲門ライブラリー」を創設したことも忘れられない。

こうした活発な展示会活動などによって館蔵資料の特色が明らかになって、わが図書館のもつ「明治期」の図書の充実ぶりが再評価されることとなり、山本信男氏を中心に「明治期資料のマイクロフィルム化事業」を発足させることにした。おりから紙の劣化が問題とされ出したころでもあり、この事業も順調にすべり出したのである。

平山画伯の「熊野古道」収蔵 館長時代の思い出はきりがないので、最後に、平山郁夫画伯の「熊野古道」収蔵の経緯について若干記しておこう。私は、新中央図書館には、旧図書館の横山大観・下村観山合作の「明暗」に比すべき名画を収蔵すべきであろうと考え、その思想性から平山画伯に依頼すべきと館長就任時から決意していたのであった。

機会は比較的早くやってきた。平山先生がネルー生誕一〇〇年記念講演で早稲田に来訪されることを知った私は、今井半事務長に、平山先生の帰途をつかまえて、なんとしても館長室へ拉致して欲しいと告げ、それが成功した。ここで、私は旧図書館の「明暗」の由来、館蔵の平山先生の師に当る前田青邨の「ローマ使節」の話し、そして、新中央図書館のすばらしさを説明した上で、先生に新中央図書館中央壁面を飾る大作を「求道」というテーマで依頼したところ、先生は「ローマ使節」の修復を手がけたという縁もあってころよく二年後の院展の出品作を約束してくださった。そこで、私は小山総長のところに出かけ、その話をしたところ、総長はたいへん驚かれたが、説得の結果、最終的には三億円以内でまとめることでなんとか納得していただいた。

さて、開館後、「熊野古道」が完成して、いよいよ中央図書館に搬入するときがきた。平山画伯の代理人である銀座の村越画廊がやって来て提示した価格は三億円であった。本来ならば五億円であるが、大学なので平山先生が特別安くするようにとの指示があったのでこの値段だとのことであった。しかし、私は一億円、十年年賦を主張して譲らず、あきれはてた村越画廊は後日改めて来ることになった。再度、村越画廊がやって来て言うには、平山先生と相談したところ、先生はそれでよいと言われたが、画廊としては支払いは一括にして欲しいとのこと。そこで、私は小山総長にその旨を報告したところ、総長は難色を示すのみで、ついに承諾してはもらえなかった。

そんなこともありうると考えていた私は、支払を大学にしてみらうことをあきらめ、当時私が社長をしていた早稲田大学出版部で買い取り、それを大学に寄附するという奇策を用意していた。当時、出版部は黒字経営であり、その年の約二億円のうち一億円を大学へ寄附して「熊野古道」を買い上げようではないかと社員に相談すると全員が大賛成だった。そういうわけで、中央図書館の「熊野古道」は株式会社早稲田大学出版部の寄贈なのである。

四 館長退任後の図書館

図書館長という職は、私にとっては、これほど愉快でやり甲斐のある職はないと思われ、できることなら当分続きたいとさえ願っていたが、この地位は総長指名職である。館長二期目の終りごろ私は法学部長に選出されたため、仕方なく退任せざるを得なかった。

考えてみれば、私が館長として楽しく仕事できたのは、野口洋二副館長（選書担当）、成田誠之助副館長（情報システム担当）、今井半事務部長、千葉敏総務課長など多くの方々のおかげであり、まことに感謝にたえない。とりわけ後事を託した野口館長には、私が総長になった後も、図書館長四年に加えて文化担当理事としてさらに八年間にわ

たつて、図書館を担当していただき、一時期は、演劇博物館長や会津博物館長をも兼任していただきご苦勞をおかけすることになった。野口先生の口癖によると、私は先生の人生を誤らせる（？）ことになり、申訳ない次第といわねばならない。しかし、野口先生とのコンビは実に愉快であり、いまにいたるも続いている。なお、余談ながら、このころの図書館員とのつきあいが、現在にいたるも、「山楽会」として続いており、私の活力の源の一つとなっている。さて、館長退任後の図書館とのかかわりは、地下書庫の三・四階部分に自動書庫を設置するための予算くらいなものであり、特に記すほどのことはないが、イギリスの東インド会社関係資料の購入をめぐる問題を契機として副館長をつとめた川勝平太氏が早稲田を去るにいたったことは、いまなお心を痛める事件であったとのみ記しておきたい。

またまた余談となるが、あえて蛇足を加えるならば、私の図書館人生は、『図録大隈重信』（昭和六三年）に始まり、『図録小野梓』（平成一四年）に終るとい感じがする。もとより、小野梓先生の生誕一五〇周年は、総長としての私の最晩年に当り、図書館との関連は表面的にはほとんど見えないが、実質的にはその運営に関係している。その意味では、建学の父と母の顕彰にかかわり、お二人について深く学ぶ機会をもったことは私個人にとって望外の幸せというべきであったと思う。これまた余談であるが、おかげで、小野梓先生の生誕の地（高知県宿毛市）に「小野梓記念公園」を創設することができたからである。

五 エピローグ

図書館長に就任した年（一九八六年）、私は、一泊旅行で、図書館員たちと貸切りバスで早稲田大学図書館の元祖ともいうべき市島謙吉（春城）先生の墓参りに出かけた。新中央図書館着工を機に、原点からの再出発を考えたからである。その原点とは、館蔵資料の充実にほかならない。図書館の原点はまさに選書にあり、蔵書にある。その想いは、

私の研究者人生の原点でもある。その想いの一端は、私が私立大学図書館協議会の会長をしていたころ、その総大会における「私の仏法古書遍歴」（会報九七号、一九九二年）と題する講演で述べたことがある。

いま私は、現役最後の年を迎え、長年収集してきたフランス商法関係図書を中心に個人文庫である「西北文庫」の整理に余念がない。いずれこの文庫は早稲田大学中央図書館に寄贈することになる。私にとつての老後の楽しみの一つは、この文庫をもとにフランス会社法史に関する専門書を二、三冊発行したいということにある。せっかくの手許の資料を活かしたのである。自慢ではないが、私のフランス商法に関する蔵書は、世界一とはいえないまでも、日本一の内容をもつと確信しているからである。それがせめてもの図書館長だった私の心意気（？）を示すものである。

（おくしま たかやす 第十三代館長・大学院法務研究科教授）